

『平安朝日記と現代人の文語文』

つちだりうたらう
土田龍太郎

(講演要旨)

世間通用の口語文にむかへて用ひきたれる文語文なる名辭もとより總稱にして、その指すところげに多岐にわたれり。されば文語もて文綴らむとせば、時にとりて適はしき文の躰をおのがさまざまに選ひ用ひむほかあるべからず。

ここに平安朝假名日記假名物語をまねびて文作るものありたらむに、心すべきことどもあまたあり。つづさに論はむもちたければ、左にはただ片はしばかりをぞ列ぬるなる。

一、日頃より古書に讀み習ひて平安朝和文の文法・語法・語彙つまびらかに知らでるべからざるは言ふもさらなり。かの鈴屋大人の著されし玉あられなど良き手引きともやなりなむ。

一、和語と漢語、雅語と俗語みだりに混へ用ふべか

らず。

一、和語の内にも訓讀語と非訓讀語のけぢめあり。この辨へなきままに訓讀語多く用ふるはわるし。

一、さはれ、ことにわざとがましくてめざましききはならずは、漢語・訓讀語・俗語なりともあながちに嫌ふべきにもあらし。

古き世のめでたき假名文を雅文古文とせば、さながら古文のままに文綴らむことまことは望むべからず。

今の世の人いかに巧みをこらすとも、その綴れる文、擬古文の上にはさらに出づべからで、眞古文のさかひにはゆめ至るまじとぞ心得まほしき。擬古作文とてもつまりは尙古趣味にすぎじ、させるえうなきわざせでもありなむかしとて輕しめ言はむ人はた少なからざるべし。さはれ擬古文によらずはすぐには述べが

たき事物・情緒・風景あまたあれば、擬古作文の意義
今の世になしとはかつて思ふべからず。

なでふことなけれどもいかにぞや今にえ忘れぬ昔の
こと、あるはまたよきにつけうきにつけ日々にふとき
ざせるなにもなきもの思ひ、かかるはかなしごとさ
ながら述べ記さまくほりするときは、擬古文躰を用ひ
むかたもつともしかるべしとこそおぼゆるなれ。

右のこと説きて後、講演者、紫式部日記に載れる歌の
こと述べりし自作の擬古文を朗讀したり。